HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	中ソ論争の焦点, 1963-64(上)
Author(s)	猪木, 正道
Citation	スラヴ研究, 11, 1-26
Issue Date	1967
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/4983
Type	bulletin (article)
File Information	KJ00000112885.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

中ソ論争の焦点，1963–64（上）

猪　木　正　道

(1)

中国共産党とソ連共産党との対立は，次第に国家間の対立・抗争に発展した。また中国のいわゆるプロレタリア文化大革命が深刻化するにともなって，中ソ対立が中国共産党内の権力闘争と，不可分に結びついていることもますますはっきりしてきた。ここでは，中ソ対立における両国共産党の立場を考察することにしたい。

ソ連共産党中央委員会は，1963年に入って，いくつかの重要な書簡を，中国共産党中央委員会に送った。1962年10月のキューバ危機に際して，ソ連がミサイルを撤去したことは，中国共産党からの批判を表面化させ，中ソ論争を両党間の公然たる応酬にまで激化させた。そこで1963年2月21日付の書簡により，ソ連共産党中央委員会は，中国共産党中央委員会に対して，両党代表者の会談を行うことを提案し，中国共産党中央委員会は同年3月9日付の書簡で，この提案を受諾した。

ところが上記提案にもとづき，1963年7月5日，モスクワにおいて，両党の代表者間に会談が開始されたまさにその日に，ソ連外務省は，中国外交部スポークスマン声明を批判する文書を公表しなければならなかった。(1) つまり，1963年6月14日付中国共産党中央委員会のソ連共産党中央委員会にあてた書簡の写しを中国大使館員と在ソ中国人とが不法に配布したという理由で，ソ連側が5名の中国人（うち3名は中国大使館員）の国外退去を求めたことがきっかけとなって，中ソ両国政府間の関係がいちじるしく悪化したわけである。こうした状況の下で，中ソ両共産党会談が成果をおさめるはずがない。この会談は当然決裂し，中ソ論争は，新たな段階に入った。そこで本稿では，この直後に，ソ連共産党中央委員会が，全党組織と全共産党員にあてた公開状(2)から出発して，中ソ論争の焦点を明らかにしたい。この公開状に対しては，中国共産党が，きわめて詳細な反論を行っているので，その方から見ることにしよう。(3)

まず中国共産党は，両党の意見の相違は，ソ連共産党第20回大会からはじまったことを次のように力説している。

「ソ連共産党中央委員会の公開状は，国際共産主義運動の意見の相違が，まるで1960年の4月にわれわれが発表した『レーニン主義万歳』など3つの論文からひきおこされたかのような言い方をさかんにしている。これはまったくの大ウソである。

では事実はいったい，どうなのであろうか。

事実，国際共産主義運動中の一連の原則的意見の相違はすでに7年あまりもまえにはじまっている。

具体的にいえば，それは1956年のソ連共産党第20回大会からはじまったものである。

ソ連共産党第20回大会は，ソ連共産党の指導部が修正主義の道をあゆみはじめた第一歩である。ソ連共産党第20回大会から今日まで，ソ連共産党指導部の修正主義路線は，発生，形成，発展，そして系統化の過程をへてきた。ソ連共産党指導部の修正主義路線にたいする人びとの認識も，しだいに深まっていく過程をへてきた。

われわれは，ソ連共産党第20回大会が現代の国際闘争と国際共産主義運動について提起した観点の多くは，間違ったものであり，マルクス＝レーニン主義にそむくものであるとずっと考えている。とくに，いわゆる個人崇拝反対を口実にスターリンを全面的に否定したことと，いわゆる『議会の道』をへて平和的に社会主義へ移行する，というこの二つの問題は，なおさらのこと，きわめて重大な原則的な誤りである。」

つづいて中国共産党は，ソ連共産党第20回大会のスターリン批判が，「原則のうえでも，方法のうえでも，ともに誤っている」ことを次のように指摘する。

「スターリンの生涯は偉大なマルクス＝レーニン主義者としての一生であり，偉大なプロレタリア革命家としての生涯である。レーニンが逝去して以後の30年間に，スターリンはソ連共産党とソ連政府の主要な指導者であり，国際共産主義運動の公けに認められた指導者であり，世界革命の旗のにない手であった。スターリンはその生涯で，いくつかの重大な誤りをおかした。しかし，これらの誤りもかれの偉大な功績と比較すれば，なんといっても二次的なものである。

スターリンには，ソ連の発展と国際共産主義運動の発展にとって偉大な功績がある。われわれは，1956年の４月に発表した「プロレタリアート独裁の歴史的経験について」という論文でつぎのようにのべた。

『レーニンの逝去したあと，党と国家の主な指導的人物としてスターリンは，マルクス＝レーニン主義を創造的に運用し，発展させた。レーニン主義の遺産をまもり，レーニン主義の敵トロッキスト，ジノビエフ分子とその他のブルジョアジーの代理人に反対する闘争で，スターリンは人民の意志と希望を表明し，ぬきんでたマルクス＝レーニン主義の戦士として恥じなかった。スターリンがソ連人民の支持を勝ちとり，歴史上重要な役割をはたしえたのは，なによりもまず，スターリンがソ連共産党のその他の指導者とともにソヴィエト国家の工業化と農業集団化についてのレーニンの路線をまもったからである。ソ連共産党はこの路線を実行して社会主義制度をソ連で勝利させ，また，ソ連が反ヒトラー戦争で勝利する条件をつくりだした。ソ連人民のこれらすべての勝利は，全世界の労働者階級とすべての進歩的な人類の利益に合致するものである。したがって，スターリンというこの名前も，きわめて自然に，世界でもひじょうに高い栄誉をかちとった。』

スターリンの誤りは当然批判されなければならない。しかし，フルシチョフ同志がソ連共産党第20回大会でおこなった秘密報告はスターリンを全面的に否定し，プロレタリアート独裁をみにくくえがき，社会主義制度をみにくくえがき，偉大なソ連共産党をみにくくえがき，また国際共産主義運動をみにくくえがいている。フルシチョフ同志は，プロレタリア革命政党の批判と自己批判の方法を運用し，プロレタリアート独裁の歴史的経験を真剣に厳粛に分析し，総括するのではまったくなくて，敵にたいする方法でスターリンに対

処し，すべての誤りをみなスターリン一人におしつけた。

フルシチョフは，秘密報告のなかでたくさんのウソをでっちあげ，あくどい扇動的なことばをつかってスターリンのことを『迫害狂』とか，『冷酷な専制』だとか，『大がかりな迫害の道にふみだし，テロの道にふみだした』とか，『映画でしか国内の状況や農業を研究しなかった』とか，『地球儀相手に作戦を研究した』とか，はては，スターリンの指導は『ソヴィエト社会の発展途上の重大な障害となった』などと攻撃した。フルシチョフはスターリンがソ連人民をみちびいて国内外の敵とだんことした闘争をすすめ，社会主義改造と社会主義建設の偉大な成果をおさめた功績をまったく抹殺し，スターリンがソ連人民をみちびいて世界で最初の社会主義国をまもり，うちかため，反ファッショ戦争の偉大な勝利をかちとった功績を抹殺し，マルクス＝レーニン主義をまもり，発展させたスターリンの功績を抹殺している。」

次に中国共産党は，スターリン批判をきっかけとして，ソ連共産党が「一連の原則的な問題で，マルクス＝レーニン主義にそむきはじめた」ことを次のように批判している。

「フルシチョフがソ連共産党第20回大会でスターリンを全面的に否定したことは，実質的にはプロレタリアート独裁を否定するものであり，スターリンがマルクス＝レーニン主義の基本的原理をまもり，発展させたことを否定するものである。まさにこの大会でフルシチョフはその総括報告において，一連の原則的な問題で，マルクス＝レーニン主義にそむきはじめたのである。

フルシチョフはソ連共産党第20回大会の総括報告で，世界の情勢にすでに『根本的な変化』が生じたという口実で，いわゆる『平和的移行』の論点をうちだした。フルシチョフは，十月革命の道は『当時の歴史的条件のもとでは』，『唯一の正しい道であったが』，現在では状況はかわり，『議会の道をとおって』，資本主義から社会主義へ移行する可能性がある，といっている。こうした間違った論点は，実質的には，マルクス＝レーニン主義の国家と革命についての学説を公然と修正し，十月革命の道の普遍的意義を公然と否定したものである。

フルシチョフはまた，総括報告で，世界の状況はすでに『根本的変化』をきたしたということを口実に，レーニン主義の帝国主義についての原理，戦争と平和についての原理がひきつづき有効であるかどうかという問題をだしたが，これも実際には，レーニンの学説を書きかえたものである。

フルシチョフは，アメリカ政府とその首脳者を帝国主義戦争勢力の代表者ではなく，戦争勢力に抵抗しているものとみなしている。フルシチョフは，『アメリカでは戦争の方式で未解決の問題を解決するよう主張するものがまだ有力な地位を占めており，かれらは大統領と政府に大きな圧力をかけている』とのべている。フルシチョフはまた，帝国主義者は，力の政策がすでに破綻したことを認めはじめており，かれらのあいだには『いくらか冷静なきざしがあらわれている』とのべている。これはつまり，アメリカ政府とその首脳者はアメリカ独占ブルジョアジーの利益を代表しなくてもよいし，侵略政策と戦争政策を放棄してもよいし，それどころか，平和をまもる勢力になった，というのである。

フルシチョフは，『平和と各国人民の安全のための闘争の面で，また経済と文化の面で

われわれはアメリカと友好的に協力したいと願っている』と声明している。ほかでもなくこうした間違った観点が，のちにいわゆる，『ソ連とアメリカが協力して世界の問題を解決する』という路線にまで発展したのである。

フルシチョフは，社会制度のことなる国の平和共存についてのレーニンの正しい原則を歪曲して，平和共存がソ連の『対外政策の総路線である』と提起した。これはつまり，社会主義諸国間の相互援助協力も，被抑圧人民，被抑圧民族の革命闘争にたいする社会主義国の支援も，みな社会主義諸国の対外政策の総路線から除外してしまうか，あるいはこれらすべてを，かれらのいわゆる『平和共存』の政策に従属させてしまうのである。

ソ連共産党指導部が，ソ連共産党第20回大会に提出した一連の問題，とりわけスターリン大会についての問題と，いわゆる『平和的移行』の問題は，ぜったいにソ連共産党一党の内部のことがらではなく，各国の兄弟党に共通してかかわりのある重要な問題である。ソ連共産党の指導部は，事前に兄弟党の意見を少しも求めようとはせず，独断で結論をくだし，兄弟党に既成の事実をうけいれるよう強要し，また，いわゆる『個人崇拝反対』を口実に使って，乱暴にも兄弟党，兄弟国の内政に干渉し，かれらの指導部を転覆させ，国際共産主義運動のなかで，自己のセクト主義の政策をおしすすめた。

ソ連共産党の指導者が，マルクス＝レーニン主義とプロレタリア国際主義にそむき，これをみだりに書き改めたのは，上にのべたような誤りから発展したものであることはその後の事実の発展から人びとはますますはっきりと見てとることができる。」

つづいて中国共産党は，ソ連共産党第20回大会をめぐる見解の相違について，両国共産党がどのように対処してきたかという問題に転じて，次のようにのべている。

「ソ連共産党第20回大会にたいし中国共産党はこれまで原則的に異なった意見をもっているが，このことは，ソ連共産党の指導的な同志は十分よく知っていることである。ところが，ソ連共産党中央委員会の公開状は，中国共産党が過去，ソ連共産党第20回大会を全面的に支持したといいはっており，われわれのソ連共産党第20回大会にたいする評価を『180度転換した』などといい，われわれの立場は『動揺して定まらない』とか，『いつわりのものだ』などといっている。

ソ連共産党の指導部が勝手におおいかくそうとしても，それはできるものではない。やはり，事実によって話をしようではないか。

事実はこうである。ソ連共産党第20回大会以後，中国共産党中央委員会の指導的な同志は，これまで内輪の話しあいで，ソ連共産党指導部の誤りをなんどとなく厳正に批判した。

1956年4月，つまり，ソ連共産党第20回大会後2カ月もたたないときに，毛沢東同志は，ソ連共産党中央委員会幹部会員ミコヤン同志，中国駐在のソ連大使とあい前後して談話をおこない，スターリン問題にたいするわれわれの意見を表明した。毛沢東同志は，スターリンの『功績が，過失よりも大きいこと』，スターリンにたいして『具体的に分析すべきであり』，『全面的に評価すべきである』ことをつよく指摘した。

1956年10月23日，毛沢東同志は中国駐在のソ連大使と会見したさいに，『スターリンは批判する必要がある。しかし批判の方法について，われわれはちがった意見をもっている。また若干の問題ではわれわれは賛成できない』と指摘した。

1956年11月30日，毛沢東同志は中国駐在ソ連大使と会見したさいにも，また，スターリンが政局を担当していた期間の基本方針と路線は正しいものであったこと，また，敵にたいする方法で自分の同志に対処してはならないことを指摘した。

劉少奇同志が1956年10月に，ソ連共産党の指導者とおこなった談話のなかでも周恩来同志が1956年10月1日，当時，中国共産党第8回大会に出席していたソ連共産党代表団との談話のなかでも，周恩来同志が1957年1月18日，ソ連共産党の指導者とおこなった談話のなかでも，いずれも一再ならず，スターリン問題にたいするわれわれの意見をのべ，ソ連共産党の指導者の誤りを批判した。これらの誤りのおもな点は，スターリンにたいし，『全面的な分析を全然おこなっていないこと』，ソ連共産党の指導者が『自己批判に欠けていること』，『事前に兄弟党と相談しなかったこと』である。

平和的移行の問題についても，中国共産党中央委員会の指導的な同志は，ソ連共産党の同志との内輪の話しあいで，われわれの異なった意見を何度となくだしてきた。1957年11月，中国共産党中央委員会は，また，ソ連共産党中央委員会に，書面による『平和的移行の問題についての意見要綱』をだして，全面的に，明確に，中国共産党の観点をあきらかにした。

中国共産党中央委員会の指導的な同志はソ連共産党の同志との何回にもわたる内輪の話しあいで，ソ連共産党第20回大会の誤りに焦点をあわせて，国際情勢と国際共産主義運動の戦略問題についてのわれわれの観点を系統的に明らかにした。

これらすべては，みな，ひじょうにはっきりとした事実である。ソ連共産党の指導部は，どうしてぬけぬけとでたらめをいい，頭からこれを抹殺することができるのだろうか。

ソ連共産党中央委員会の公開状が，これらの重要な事実をおおいかくし，毛沢東同志，劉少奇同志，鄧小平同志のある公開の話のなかの断片をぬきとって，中国共産党がかってソ連共産党第20回大会を全面的に肯定したと証明しようとしても，それはムダである。

事実は，中国共産党がこれまでどんなときでも，どんな場合にも，ソ連共産党第20回大会を全面的に肯定したことはなかったし，スターリンを全面的に否定することに同意したことはなかったし，いわゆる『議会の道』をとおって，社会主義へ平和的に移行するという観点に同意したこともなかった。」

同じ論文の中で，中国共産党は，次のように十一カ条をあげて，ソ連共産党が国際共産主義の団結を破壊したと非難している。

「つぎのことは，ソ連共産党第22回大会いらい，ソ連共産党指導部が中国，ソ連の団結を破壊し，兄弟党，兄弟国の団結を破壊したおもな事実であろう。

第一　ソ連共産党指導部は，自分の誤まった路線を国際共産主義運動になんとかしておしつけようとし，自分の修正主義の綱領をなんとかして，『宣言』と『声明』におきかえようとした．かれらは自分の誤った路線を，『国際共産主義運動の近年来の全面的なレーニン主義的方針である』などといい，自分の修正主義の綱領を，『われわれの時代の真の共産党宣言』であり，『共産党，労働者党および社会主義の友好協同体の各国人民』の『共同綱領』であるなどといっている。

どの兄弟党にせよ，ソ連共産党の誤った路線と綱領をうけいれないで，マルクス＝レー

ニン主義の基本的原理を堅持し，宣言と声明の革命的原理を堅持しようとすれば，ソ連共産党指導部はこの兄弟党を敵とみなし，あらゆる可能な手段にうったえて，それに反対し，それを攻撃し，それに損害をあたえ，その指導部をくつがえそうとした。

第二　ソ連共産党指導部はすべてをかえりみずに，兄弟党，兄弟国家の関係で，歴史上前例のない行動をとり，社会主義のアルバニアとの外交関係を断絶した。

第三　ソ連共産党指導部はひきつづき中国に圧力をかけ，中国共産党をあくどく攻撃した。1962年２月22日，ソ連共産党中央委員会は，中国共産党中央委員会あての書簡で，われわれのことを，「特殊の立場」をとっているとか，兄弟党の共同の方針とちがった路線を実行している，などと非難するとともに，われわれがマルクス＝レーニン主義のアルバニア労働党を支持していることをも一つの罪にかぞえた。ソ連共産党指導部はまた，中国共産党に，マルクス＝レーニン主義とプロレタリア国際主義の立場をすてさせ，一貫して堅持してきた『宣言』と『声明』にまったくかなった革命的原則の路線をすてさせ，ソ連共産党指導部の誤った路線をうけいれさせ，かれらが兄弟党，兄弟国家の関係の基準を破壊した既成事実をうけいれさせて，これを中ソ関係改善の条件にしようとはかった。ソ連共産党中央委員会の公開状は，この時期に，ソ連共産党中央委員会が中国共産党中央委員会におくった書簡や，1962年の10月に，フルシチョフが中国のソ連駐在大使に団結しなければならないと話したことなどをおおいに吹聴しているが，実際にはこれはすべて，この卑劣な目的をたっするためのものである。

第四　ソ連共産党中央委員会は，インドネシア，ベトナム，ニュージーランドなどの，兄弟党の各国兄弟党代表者会議開催についての提案を拒否し，また中国共産党中央委員会が1962年４月７日に，ソ連共産党中央委員会にあてた書簡のなかで，兄弟党の会議開催の準備のためにだした五項目の積極的な提案をも拒否した。ソ連共産党中央委員会は，1962年５月30日，中国共産党中央委員会にあてた返書のなかで，ソ連とアルバニアの関係を改善する前提条件として，アルバニアの同志はかならず自分の立場を放棄しなければならない，とさえ要求した。

第五　1962年の４月から５月にかけてソ連共産党指導部は，中国の新疆地方に駐在しているかれらの機構と要因をつうじて，イリ地区で大規模な転覆活動をおこない，数万の中国の公民をおびきよせたり，脅迫したりして，ソ連国境内に逃亡させた。中国政府が再三にわたって抗議し交渉したにもかかわらずソ連政府は『ソヴィエトの法律制度の感覚』とか『人道主義』とかいう口実で，これらの中国の公民を送りかえすことを拒否した。この事件はいまになってもまだ解決されていない。これは社会主義国家の関係で，まったく前例のない，おどろくべき事件である。

第六　1962年８月，ソ連政府は，ソ連がアメリカと核拡散を防止する協定をまとめるつもりである，と中国に正式に通告してきた。これはソ連とアメリカが共謀して，核兵器を独占し，中国が核兵器をもってアメリカの核恐かつに抵抗する権利をうばおうとくわだてたものである。中国政府はこれに何回も抗議した。

第七　ソ連共産党指導部は，アメリカ帝国主義との政治的取り引きにますます熱中し，社会主義陣営と国際共産主義運動の利益を犠牲にすることをも辞さないで，いちずにケネ

ディと反動同盟を結ぼうとしている。ソ連共産党指導部がカリブ海の危機に際して，アメリカ帝国主義の核恐かつに屈服し，アメリカ政府の提出したキューバの主権をおかす，『国際査察』なるものをうけいれ，降伏主義の誤りをおかしたことは，そのめだった例である。

第八　ソ連共産党指導部は，インドの反動派との結託にますます熱中し，いちずにネールと反動同盟をむすび，社会主義の中国に反対している。ソ連共産党指導部とかれらの新聞，雑誌は，公然とインド反動派の側にたって中印国境衝突での中国の正義の立場を非難しネール政府を弁護している。ソ連がインドにあたえた経済援助のうち，三分の二は，インド反動派が中印国境衝突をひきおこしたあとインドに与えられたものである。ソ連共産党指導部は1962年の秋，中印国境で大規模な武力衝突がおきたあとでさえ，なおもインド反動派に軍事援助をおこなっている。

第九　ソ連共産党指導部は，ユーゴスラビアのチトー一派と結託することにますます熱中し，いちずに裏切り者チトーと反動同盟を結んで，すべてのマルクス＝レーニン主義党に反対している。ソ連共産党第22回大会以後，ソ連共産党の指導部は一連の行動をとって，公然と1960年の『声明』を破棄し，チトー一派の泥をあらった。

第十　1962年11月から，ソ連共産党指導部は国際的な規模で，いっそうはげしく中国共産党とその他のマルクス＝レーニン主義党に反対し，社会主義陣営と国際共産主義運動を分裂させるあたらしい逆流をまきおこした。フルシチョフは，つぎつぎと演説をおこない，ソ連の新聞，雑誌はあいついで，数百篇もの文章を発表し，一連の問題で中国共産党を攻撃した。ソ連共産党指導者の指揮のもとに，ブルガリア，ハンガリー，チェコソロバキア，イタリア，ドイツ民主共和国の五つの兄弟党の大会が，中国反対の大公演の舞台にかわり，40あまりの兄弟党が，決議や声明や論文を発表して，中国共産党とその他のマルクス＝レーニン主義党を攻撃した。」

(2)

その後，中国共産党は，1963年9月13日，同年9月26日および10月22日の三回にわたって，ソ連共産党中央委員会の公開状を痛烈に批判している。特に『新植民主義の弁護人』と題する10月22日付の批判は悪罵といってよいほどはげしかった。ソ連共産党の指導的理論家として知られるスースロフ幹部会員は，これに対して，1964年2月の中央委員会総会で，立ち入った反論を試みた。(4) スースロフはまず社会主義世界体制の役割を次のようにとりあげている。

「1963年10月22日付『人民日報』と『紅旗』の主張は，『アジア，アフリカ，ラテン・アメリカにおける民族解放革命は，こんにち帝国主義に直接的な打撃をあびせる，もっとも重要な勢力として登場している』とのべている。

ここでは，労働者階級の歴史的役割についてのマルクス主義の学説が明らかに修正され，先進資本主義諸国の労働運動が低く評価されている。社会主義世界体制についていえば，中国の理論家は，全世界の被圧迫民族と被圧迫人民の革命を支持し発展させるための「支援基地」の役割しかこの体制にあたえていない。いうまでもないことだが，このような立

場は，社会主義体制ばかりでなく，民族解放運動と国際プロレタリアートの闘争の偉大な事業にも，ただ損害をあたえることができるだけである。

中国の理論家たちの見解によれば，社会主義世界体制は，世界の発展過程全体にますます決定的な影響をおよぼしていないばかりか，帝国主義にたいする大衆の革命的闘争で独自の役割さえはたしていない，ということになる。

社会主義世界体制の役割と意義をこのように解釈することは世界の実際の力関係に一致していないし，1960年の兄弟諸党の『声明』にのべられた結論にまっこうから矛盾している。」

次に戦争，平和および革命の問題に転じて，スースロフは次のように論じている。

「国際舞台における力関係を全面的に分析した結果，共産党と労働者党は，社会主義が世界でまだ完全に勝利する以前に，世界戦争を防止することは可能であるというきわめて重要な結論をひきだし，社会制度の異なる諸国家の平和共存のレーニン的原則は，社会主義諸国家の対外政策の不動の基礎であることをふたたび強調することができたのである。

周知のように，これらの命題は，1957年と1960年のモスクワ会議の宣言と声明に明記されている。ここ数年間の経験は，平和共存政策の切実な必要性をぐらつかせるどころか，逆にこの必要性を完全に立証したのである。まさしく，社会主義諸国が世界のいく億の人びとに支持されたこの政策を一貫して実証したおかげで，平和にホコ先をむけた帝国主義反動の陰謀を粉砕することができた。こんにち人類は平和のめぐみを享受しているが，これは神のたまものではない。これは熱核戦争開始の試みに反対するすべての平和愛好勢力のねばり強い闘争の現実的な結果であり，ソ連と他の社会主義諸国の威力が増大した結果であり，さらにまた平和闘争の旗を高くかかげ，すべて先進的な人びとをこの旗のもとに結集した共産党の正しい政策の結果である。

中国共産党指導者はソ連共産党と他のマルクス＝レーニン主義諸党にたいする論争，ひきつづき政治闘争の道にふみ入り，ソ連共産党第20回大会の結論，戦争，平和，革命の諸問題にたいしては，とくに力を入れて攻撃をくわえた。かれらは，まさにこの問題で自分の政治資金をかせぐことができると考え，このために共産主義運動全体にたいして，『革命の見通しを失っている』とか『帝国主義への降服』などと非難をあびせながら，おそいかかってきたのである。

こうしたいまわしい非難に，せめてなにかもっともらしい外見をあたえるために，中国の理論家たちは見えすいた古くさい手段に訴えている。つまり単一の社会的過程の２つの現象を故意に引きはなして，平和闘争を革命運動に対置し，この２つの重要な課題がたがいに反発しあうものであるかのように問題を描きだしている。中国の理論家たちの図式によれば，平和のため，世界戦争防止のためにたたかうものは革命に反対し，革命闘争を妨げているということになる。

弁証法の大家をもって認ずる中国共産党の指導者たちが，実際には，レーニンの比喩的な言葉をかりると，マルクス主義のこの「神髄」をあっさりほうむり去ってしまったことを理解するためには，特別なマルクス主義の教養を必要としない諸共産党は，平和闘争の旗を高くかかげながら，プロレタリアートと勤労者の階級闘争と帝国主義にたいする民族

解放運動をますます精力的に展開している。

中国共産党の指導者たちは，レーニンの平和共存路線に反対する闘争をおこない，この路線に，戦争の助けをかりて革命を「推進」する路線を対置することによって，戦争は，資本主義と社会主義とのあいだの諸矛盾を解決するために受け入れられる，かつ本質的には唯一の手段であるとさえ主張するまでにいたっている。全世界の共産主義運動の経験を無視して，かれらは，中国革命の勝利の路線を絶対化し，その路線を，すべての国と人民にとって不変の真理にたかめようとしている。中国の宣伝機関はすでに1930年代に，中国の国内戦当時におこなわれた，戦争と平和の諸問題についての毛沢東の発言を所かまわず引用している。

たとえば，毛沢東のつぎのような発言はひろく知れわたっている。——『人類の圧倒的多数が遂行する戦争は，人類が新しい歴史的時代に移行するかけ橋となるであろう。世界の改造は，銃の力によってのみ可能である』，『われわれは，戦争の根絶に賛成である。戦争はわれわれには必要ではない。しかし，戦争を根絶することは，戦争によってのみ可能である。銃の廃止を欲するならば，まず銃をとれ』と。

これらの発言がなされたときから，ほとんど30年がすぎさっている。世界には根本的な変化が生じた。社会主義世界体制は発展して強大な勢力となり，労働者階級の革命運動は大衆的性格をおび，民族解放運動は数々の歴史的勝利をかちとっている。諸国共産党の文献が示しているとおり，平和愛好諸勢力の同盟は，帝国主義勢力をうち破る力量をもっており，かれらが新しい世界戦争をひきおこすのを許さない。人類史上はじめてのもっとも破壊的な兵器がつくりだされ，世界の全人民にはかり知れない惨禍をもたらすほど蓄積されているので，戦争防止の課題は，とくに緊要な課題となっている。

中国の指導者は，すべてこれらのことを考慮に入れることを欲しない。かれらは，自分の無分別を公然とひけらかして，核爆弾は『張り子のトラ』である，核爆弾は戦争と平和の問題の提起になんら新しいものをもたらさないかのように主張している。もっとも初歩的な常識にも反するこのような論理にもとづいて，毛沢東は1957年のモスクワ会議で，社会主義のために闘争する事業は，世界熱核戦争の結果，有利にさえなることを論証しようと努めた。かれらは言った。——『未来の闘争は，いうならば，どのくらいの犠牲者を出すだろうか？　おそらく，全世界の人口27億の三分の一，すなわち9億にすぎないであろう。……私はこの問題についてネールと論争したことがある。かれはこの点について，私よりも悲観的であった。そこで私はかれにこう言った。人類の半分が殺りくされたとしてもまだあと半分は残っている。そのかわり，帝国主義は完全に一掃され，全世界は社会主義だけになるだろう。そして，半世紀か一世紀のあいだに，人口はふたたび増大し，半分以上もふえるだろう』と。

これと同じ考え方は，中国共産党中央委員会が承認し，宣伝している論文集『レーニン主義ばんざい！』のなかに，さらにはっきり表現されている。そのなかではつぎのように言われている。——『勝利した人民は，死滅した帝国主義の廃墟の上に，千倍もうるわしい未来を，きわめて急速なテンポできずきあげるであろう』。これこそ超革命的な大言壮語の見本であり，完全な政治的無責任の見本である。この政治的無責任は，この意見を誇

示している人びとが大社会主義国家を指導している人びとであるだけに，とくに危険なものである。」

スースロフは進んで，中国共産党の指導者たちが，民族解放運動をば，国際労働者階級からひき離そうとしている，と次のような批判を行っている。

「帝国主義の植民地体制の崩壊，解放された国ぐにの任務と見通しは，全人類の社会的進歩の中心問題のひとつとなっている。帝国主義と国内の反動は，民族解放革命の発展をおくらせ，解放された国ぐにを新植民地主義のわなにかけようとやっきとなっている。進歩的な民主主義勢力は，完全な民族解放をかちとり，非資本主義的発展の道へ移るためにたたかっている。いく億という人びとの歴史的運命は，この闘争の成否にかかっている。

世界の共産党は，その国際会議で反帝国主義運動の膨大な経験を総括し，最終的な民族的，社会的解放をめざすアジア，アフリカ，ラテン・アメリカ諸国人民の闘争をいっそう発展させる明確な行動綱領をうちだした。

中国の指導者たちは，このマルクス＝レーニン主義的綱領に，自分の特別の路線を対置し，民族解放運動を危険な道へつきおとし，アジア，アフリカ，ラテン・アメリカ諸国の人民の成果を危険にさらすおそれのある方針を民族解放運動におしつけようとしている。

中国の指導者たちにとって特徴的なことは，なによりもまず，アジア，アフリカ，ラテン・アメリカ諸国がおかれている，ひじょうに大きな条件の相違を，完全に無視していることである。これら諸国が社会・経済的および政治的発展の異った段階にあることは，周知のことである。すでに社会主義の道にはいった国家群がある。政治的独立をかちとって，根本的な社会的変革に着手したばかりの国家群もある。また全体として反帝国主義的立場に立っている民族ブルジョアジーが権力をにぎった国家群もある。形式上では政治的独立をかちとったが，カイライ政権が権力をにぎり，または帝国主義的ブロックに加わったため，事実上は自主的にならなかった国もある。さいごに，いまだに植民地支配が維持されていて，人民が自己の解放をめざして英雄的にたたかっている国もある。

マルクス＝レーニン主義者にとって，これらの国家群のそれぞれの国の人民が異なる任務に当面していることは，あきらかである。ところが中国の指導者は，諸共産党，すべての進歩的勢力に，単一の，杓子じょうぎ的な図式や闘争方法をおしつけようとしている。このことは，かれらが現段階における民族解放運動の主要任務だと称している点に，とくにはっきりあらわれている。……

中国指導者たちは，あたかもアジア，アフリカ，ラテン・アメリカ諸国民の利害はかれらととりわけ身近で，理解されやすいかのように，あたかもかれらは民族解放運動のこんごの発展にもっとも心をくだいているかのように，事態を描きだしている。ところが，事実によって，こうした声明は，決定的に打ち消されている。かれらが実際には別の動機にみちびかれていることが，ますますはっきりしている。中国共産党指導部はあきらかに，民族解放闘争の勢力を，自分がヘゲモニーをにぎる諸計画を実現する道具にかえるために，この勢力を自分の統制下におこうとのぞんでいるのである。1963年10月22日付の『人民日報』紙の論文にふくまれている考え方は，この点で特徴的である。『真』のマルクス＝レーニン主義者は北京にいるだけだということを強く論証しながらも，同紙は民族解放運動

にとってはほかならぬかれらを手本とすべきだということを，はっきり主張している。中国の指導者たちは，アジア，アフリカ，ラテン・アメリカ諸国の人民に，あらゆる点で北京のあとにしたがうように呼びかけている。この論文には，中国共産党指導部が民族解放運動におけるヘゲモニーを要求し，かれらが民族解放運動を自分の特別の目的にしたがわせようと意図していることが，はっきりとあらわれている。

そしてこのことは，多分，民族解放運動を社会主義世界体制から，国際労働者階級からひきはなそうとして中国の指導者がとっている路線の真の目的を，もっともよく解明している。

まさにこの目的のために，中国共産党の指導者は，あたかもソ連共産党は民族解放運動の歴史的役割を『過少評価』し，ソ連は平和共存のための闘争という口実で民族解放運動を『助けることを拒否している』かのような，いまわしい作り話を流布した。われわれには，こうした悪意の中傷に反論する必要はない。中国の指導者たちがソ連共産党にたいしてどんなに『強い言葉』を使おうとも，かれらは，かれらのでっちあげを立証するような事実をひとつもあげることはできない。

だが，中国共産党指導部は，中傷だけに終始しているのではない。かれらは，国際的方針としてやっているかれらの行動において，また種々の国際民主主義組織のうちでも，反帝国主義勢力の統一の強化にではなく，ソ連その他の社会主義諸国にたいする闘争に全力を集中している。とくにモシにおけるアジア・アフリカ連帯会議で，中華人民共和国代表は，このように行動した。

この会議で，中国代表団長劉寧一は，わが代表たちとの会談のさいに，こう言った。

——『東ヨーロッパ諸国は，アジア・アフリカ問題に干渉すべきではない……われわれは，そもそも諸君がここへ来たことを遺憾と思っている。なんのために，諸君がここに来る必要があるのか？ これはアフリカ・アジア諸国の連帯運動にたいする侮辱である.……諸国は勝手に行動するがよい。だが，われわれは，諸君に反対するであろう』と。中国の代表者たちは，この会議でアジア・アフリカ諸国の代表者たちに，ロシア人，チェコ人，ポーランド人は白色人種である以上『かれらをたよりにしてはならない』こと，かれらは『いつも白人のアメリカ人と談合している』こと，アジア・アフリカの諸国民は独自の利害をもっており，自分たちの別個の団体をつくらなければならないことを吹きこんだ。

さいきん中国の指導者たちは実際に，アジア，アフリカ，ラテン・アメリカ諸国のための別個の組織（労働組合，ジャーナリスト，作家，学生，スポーツなどの）をつくりはじめ，それらを世界労連，その他の国際団体に対置しようとしている。

近年における中国の指導者たちの実際行動に照らしてみて，「東風が西風を圧する」というかれらの掲げているスローガンの真の政治的意味がとくにはっきりわかった。1960年の会議（モスクワ）において，すでに，このスローガンは，階級的態度を地理的態度，さらには人種的態度にすりかえた民族主義的なものとして，だんこたる批判をうけた。このスローガンのうちには，社会主義世界体制，西ヨーロッパおよびアメリカの労働者階級と人民大衆の役割の軽視が，はっきりあらわれている。

中国の理論家たちは，『万国のプロレタリアートと被抑圧民族よ，団結せよ！』という

スローガンに表現されているすべての国ぐにおよびすべての大陸の反帝国主義勢力の団結というレーニン的思想を，民族主義的，さらに人種的基礎にもとづく東方諸民族の孤立化への呼びかけにすりかえたいのであろう。東風がなにか魔法の力をもつかのようなかれらのスローガンは，あきらかに植民地主義に抗してたたかっている諸民族のあいだに民族主義的な，さらに人種主義的な気分をあおりたてようとするものである。

帝国主義者による長年の奴隷化と搾取，被抑圧民族の名誉と民族的自尊心にたいするかれらの愚弄が，旧植民地・半植民地の住民の一部に白色人種にたいする不信を生みだし，また培養している。中国の指導者は，社会主義諸国と，先進資本主義諸国の勤労者とにたいする反感を旧植民地・半植民地の人民にうえつけ，自分をこれら民族の利益の唯一の擁護者としてひけらかすことができるだろうと期待して，こうした感情をあおりたてようとしている。なぜならば，中国のスローガンの背後にかくされている内密の意図をあかるみにだし，中国共産党指導者の遠大なねらいをばくろすれば，問題はつぎのようになるからである。すなわち，かれらの考えによれば，中国は東方の最大の国であり，中国は東方の利益を代表している。そこで，『西』風を『圧する』『歴史の風』が生まれる，というわけである。」

さらにスースロフは，中ソ関係そのものに論及して，中国共産党を次のように非難している。

「『大躍進』政策の結果生じた中国経済発展の破たんをなんとか弁明するために，中国共産党指導者はソ連人専門家の問題をとくにしばしばもちだしている。そこで，この問題はわが党の公式文書ですでに再三説明されてきたところではあるが，もう一度これをとりあげなければならない。

専門家を中国に派遣するにあたり，ソ連政府は，しかるべき幹部要員を十分な数だけもたない中国の国民経済の発展に協力するために，これら専門家が必要なのだと考えていた。これはけっして商業取引ではなく，中国人民への兄弟的な援助のほんとうのあらわれであった。

外国人専門家は一時的に必要なものであって，兄弟の社会主義諸国では自国の熟練した幹部要員が急速に成長しているという点を考慮して，ソ連政府は1956年に，ついで1958年に，ソ連人専門家を帰国させる問題を提起した。当時まだソ連人専門家が働いていた他の人民民主主義諸国にたいしても，同様の提案がおこなわれた。専門家の必要がなくなったので，中国をのぞくすべての国はこの提案をうけいれたが，中国政府はソ連人専門家をさらに一定期間残留させるよう要請した。

ソ連人専門家をのこすことを主張しながら，中国側当局はそれと同時に故意にかれらにたいする自己の態度を悪化させ，かれらの仕事にとってたえがたい条件をつくりあげた。

わが国の専門家の中国滞在の最後の数年間は，「大躍進」政策の時期にあたっていた。この政策の結果，経済発展の均衡がやぶれ，あらゆる技術上の基準からの逸脱がおこった。ソ連人はこのような政策がもたらす危険な結果をみないわけにはいかなかった。かれらは，技術上の要求に違反しないよう，中国の諸組織に警告した。だが，だれもかれらの忠告に耳をかさなかった。ソ連人専門家の勧告が無視され，技術上の基準が中国の働き手によっ

て乱暴にやぶれた結果，大きな事故がおこり，ときには人命の犠牲をもたらした。たとえば新安江水力発電所の建設場での事故がそうだった。ここでは技術条件無視の結果，数千トンの岩石がくずれ落ち，作業は長期にわたって中断された。新豊江水力発電所でも，同じ理由で仮締切りがやぶれ，土台穴が水没した。両方の場合とも，事故は人命の犠牲をともなった。ソ連の技師や技手がこれらすべてに無関心な態度をとるわけにいかなかったのは，当然である。かれらは抗議した。しかしその抗議はききいれられなかったので，わが国の専門家たちは帰国させてくれと要請するようになった。

それにくわえて1960年の春いらい，中国側当局はソ連人専門家を『工作』し，ソ連共産党中央委員会とソ連政府に反対する気分をかれらに植えつけようと始めたが，これはかれらの当然の憤激をよびおこした。

ソ連政府は，これらすべての憤激すべき事実にたいして一度ならず中国側当局の注意を喚起し，ソ連人専門家の活動のための正常な条件をつくるよう強く要請した。だがこれにこたえて中国側当局は，わが国の働き手にたいしていっそう非友好的，侮辱的な態度をとり，「保守主義者」として鼻であしらうようになったにすぎず，万事につけてソ連の経験や技術をけなし始めた。ソ連人にたいする監視が強化され，かれらの私物検査がひんぱんになる等々の事態が生じた。このような条件のもとでわが国の専門家を呼びもどすことは，生じた情勢からぬける唯一の手段だった。」

ソ連共産党が1961年10月の第22回党大会で採択した新綱領に対する中国共産党の批判に対しては，スースロフは次のように反論している。

「中国の理論家たちは，だれにたいして独裁を実施することを提案しているのか？　かれらは事態をどこにもっていこうとしているのか？　ソ連共産党は国内で『階級闘争の政策』をとれというかれらの要求を，どう理解すべきなのか？

社会主義建設で成果が達成されるにつれて階級闘争も不可避的に激化するという，スターリンが提起した理論が，なにをもたらしたか，われわれは知っている。周知のようにこの理論は，社会主義的法秩序のきわめて乱暴な侵犯を正当化するのに役立った。ソ連共産党はこれに終止符を打ち，これに類したことをけっして二度とゆるさないだろう。わが党は，労働者階級と農民の同盟をかため，共産主義建設者の単一の集団にすべての勤労者を統一する政策をとってきたし，今後ともとっていくだろう。（拍手）

全人民的国家と全人民の党という思想は，書斎での思索の産物ではない。これは生活によって生みだされたものであり，ソ連における社会主義的な社会関係が到達した高い成熟度を反映している。ソ連ではすでにずっとまえに搾取者階級が一掃されたので，ソヴィエト国家はくつがえされた搾取者を抑圧する機関としての性格をうしない，いまでは全人民の利益と意思を表現しているし，労働者階級の党は全人民の党となった。

社会主義の完全な最終的勝利ののちは，労働者階級はもはやプロレタリアート独裁をつうじないで自己の指導的役割を実現する。労働者階級は，共産主義建設の全面的展開期の条件のもとでも，あいかわらず社会のもっとも先進的な階級である。その先進的役割は，その経済的地位，社会主義的所有のもっとも高度な形態に直接結びついているという事情によっても，それが数十年にわたる階級闘争でもっとも強くきたえあげられ，革命的経験

を身につけているという事情によっても，規定される。

ソ連共産党綱領のこれらすべての命題の意義は，けっして理論的な意義だけにとどまらない。わが党の実践方針が，全人民を社会の管理に参加させ，共産主義建設におけるその積極性を高め，社会主義的民主主義を拡大することをめざす党の政策が，これらの命題に表現されている。ところが中国指導者は「社会主義は，民主主義がなければ不可能である」（全集　第22巻　62ページ，日本語版76ページ，『マルクス主義の戯画と〝帝国主義的経済主義〟とについて』）というレーニンの遺訓を無視している。1963年6月14日付の中国共産党中央委員会の書簡や，中国指導部のその他の発言が，社会主義的民主主義や，共産主義にむかって前進するにつれてこれを発展させていく必要性については，言及さえしていないことは，意味深長である。

中国共産党指導者は資本主義から共産主義への道程全体をつうじて，暴力の方法，抑圧の方法を理想化しているが，これはいったいマルクス＝レーニン主義的な問題の立て方といささかでも共通点をもつのだろうか？

地主と資本家にたいする革命的暴力なしには，プロレタリアートは勝利をおさめることができなかっただろうと指摘しながら，レーニンは同時に『革命的暴力は，革命の発展の一定の時期にだけ，一定の特殊な条件があるばあいにだけ，必要かつ正当な革命の手段であり，これに反して，プロレタリア大衆の組織，勤労者の組織は，この革命のはるかに根ぶかい，恒常的な本性であり，この革命の勝利の条件であったし，いまでもやはりそうである』（全集　第29巻　70ページ，日本語版 78ページ，『スヴェルドロフ追悼演説』）と書いた。

中国の理論家たちは，つぎのように主張する。――『マルクス＝レーニン主義について初歩的な知識をもつ人なら，だれでも知っているように，いわゆる『全人民の国家』はなにか目新しいものではない。ブルジョアジーの代表者たちはつねにブルジョア国家を〝全人民の国家〟あるいは〝人民権力の国家〟と呼んでいる』。

なるほど，強力な論拠ではある！　この論理にしたがうなら，共産主義者は，自由・平等・友愛・民主主義のようなスローガンの実現を，これらのスローガンがかってブルジョア革命によって提起され，その後，権力についたブルジョアジーによってゆがめられ，卑俗化されたという根拠だけにもとづいて，放棄しなければならないことになる。だがわれわれはそれとは逆に，これらのスローガンにその真実の意味をとりもどさせ，それを実現すべきだと考える。これは社会主義と共産主義の道にとってのみ可能なのである。

全人民の国家という概念についても，これと同様である。

このような国家についてラッサールが語ったとき，あるいはいま帝国主義のイデオロギーが語るとき，マルクス主義者は正当にも，かれらの理論は人民をあざむくものだと宣言する。このばあいに念頭におかれているのは，階級社会の条件のもとでの全人民の国家であるが，敵対する階級に分裂した社会においては，このような国家はありえないからである。社会主義建設の歴史的使命を国内で完遂したプロレタリアート独裁から成長する国家は，これとは別である。このような国家は，全人民の利益と意志を表現する機関以外のなにものでもありえない。

労働階級の指導的役割が保持されているソヴィエト全人民国家は，プロレタリアート独裁の国家が始めた事業を続行している。この国家は，国際労働者階級と，全世界各国人民にたいする国際的義務を忠実にはたしている。全人民の国家は，帝国主義に反対する闘争を一貫しておこない，国の防衛を確実に保障し，社会主義陣営全体をまもる事業に，貢献し，社会主義諸国との兄弟的協力を発展させている。

中国指導者は，一定の歴史的条件のもとでプロレタリアート独裁が全人民の国家に成長転化するというソ連共産党綱領の結論をゆがめて，これを社会主義建設期におけるプロレタリアート独裁の放棄としてえがきだしているが，これもまた中国指導者が論争のなかで使っている方法の特徴的な一例である。中国の理論家たちは，ソ連共産党は『マルクス＝レーニン主義の核心——プロレタリアートの独裁についての学説を，完全に投げすててしまった』とまで極言したのである。

けがわらしい，あきれはてたウソだ！　ソ連共産党綱領には，明白にこうしるされている。——『ソ連の経験は，諸国民が社会主義革命とプロレタリアートの独裁の実現の結果としてのみ社会主義に到達しうることを立証した』!。

進んでスースロフは，中国共産党の指導者たちが，国際共産主義運動の分裂をはかっていると，次のように舌鋒鋭く批判を進めている。

「中国共産党指導部は公然と，自分たちの庇護のもとに独自の国際的ブロックのようなものを組織し，これを世界共産主義運動にたいする闘争を強化する武器としてこの運動に対置する方向に事態をみちびいている。

国際的民主主義連合組織内の中国代表たちは分裂活動をいちじるしく強め，別個の組織をつくり，各国や世界の各地域の進歩勢力，民主主義勢力相互間の結合を破壊する方針を公然ととってきた。

こうして中国指導者はしばしば，団結や統一といった言辞になおかくされてはいるものの，実際には，かれらの行動はすべて国際共産主義運動をゆるがし，これを分裂させることに向けられているのである。中国指導者の政策と活動は，こんにち，世界共産主義運動の統一にとって主要な危険となっている。

中国共産党中央委員会の機関紙誌，『人民日報』と『紅旗』に掲載された，ソ連共産党と世界共産主義運動全体に反対する本年２月４日付の分派主義的論文——これは労働者階級の革命運動の一種の分裂綱領である——も，この点にてらして評価する必要がある。

中国指導者の論文は，共産主義運動の発展は，『団結——闘争またはさらにすすんで分裂——新しい基礎にたつ新しい団結』という方式にしたがってすすむかのように主張している。かれらはそのさい弁証法の法則を引きあいに出している。しかしどんなマルクス＝レーニン主義者にも明らかなことだが，このいわゆる「弁証法」なるものは，自分たちの分裂政策のエセ理論を陰蔽する，あらたなこころみにすぎない。……

中国指導者のこんにちの分裂活動からみて，中国共産党代表が1960年の会議で，『声明』のなかに，国際共産主義運動の隊列内での分派活動は許されないという条項を入れさせないためになぜあれほど熱烈に努力したかが，いっそう明らかとなった。当時，兄弟諸党は一致して，中国代表団のこうした要求を拒否した。1960年の会議は，その『声明』のなか

に，自分たちの目的達成のための闘争における共産主義者の勝利の不可欠の条件の一つは，国際共産主義運動の統一を破壊するおそれのあるどんな行動も許さないことである，と記した。

会議後まもなく，中国指導者は，すべての兄弟党といっしょにかれらも引きうけたこの義務に違反した。かれらは，とくに論文『万国のプロレタリアよ，われわれの共通の敵にたいして団結せよ』（1962年12月）のなかで，共同の決定の履行を拒否する『理論的』根拠をもりこもうとさえこころみた。中国共産党の指導者は『多数派と少数派』という概念をかかげたのだが，それによれば，少数派は共同で採択した決議を守らず，採択された共通の方針に反対して闘争する権利があるというのだ。これが意味するものは，レーニン主義の基本的な組織原則の修正にほかならない。というのは，レーニンは『少数の多数への服従だけが労働運動の原則となりうる』ことをおしえているからである（全集，第20巻354ページ，日本語版410ページ。『悪罵の政治的意義について』）」。

スースロフはさらに，中国共産党に小ブルジョワ的，民族主義的偏向の危険性が存することを次のように指摘する。

「わが党は，革命の勝利後の民主主義的および社会主義的改造の遂行における中国共産党員の経験を，つねに十分尊重してきた。1949年から1957年までの期間，中国共産党は現実主義的な方針を遂行し，他の社会主義諸国の経験を利用し，かれらの支持に依拠しながら，国の経済的および社会・政治的発展における大きな成功をかちとった。ソ連国民はこれらの成功を心からよろこんできた。

しかし1958年に，この方針はとつぜん改められ，いわゆる『三面紅旗——総路線，大躍進，人民公社』の方針にかえられた。1956年にはその解決に3つの5カ年計画およびそれ以上のものが必要とされていた課題を，中国の指導者たちは数カ年で遂行することに決したのである。5年間（1958—1962年）に工業総生産額を6.5倍に（年平均増大率45％！）農業総生産額を2.5倍に（年平均増大率20％！）増大することが決定された。

これらの計画は，どのような経済的な基礎づけもなしに，国の現実的な可能性を考慮することなしに作成された。農村につくられた人民公社は3，4年間で，あるいは5，6年間で「共産主義への飛躍」を保障するはずであった。

これらの実験の結果は一般に知られている。中華人民共和国の経済は数年前に逆もどりした。『三面紅旗』の方針は，全国民経済の深刻な混乱，工業化テンポのひどい遅滞をひきおこし，国民の物質的状態に反映した。

われわれがこれを語るのは，もちろん，中国共産党員の失敗を意地わるく冷笑するためではない。かれらとおなじように，われわれも，兄弟的な中国国民が背負うにいたった困難を悲んでいる。そしてわれわれがこれらの事実について語るのは，ただ，すでに検証ずみのレーニン主義的，社会主義建設の原則からの逸脱がなにをもたらすかをしめすためにすぎない。

中国指導部のこんにちの立場の根源を分析するとき，中国共産党指導者たちの対外活動においてとくにつよくあらわれている，ますます強まりつつある露骨に民族主義的な，大国主義的な志向のなかに，その根源を見ないではいられない。そうぞうしい「革命主義」

がもっとも狂暴な民族主義と手をつないで歩いていたことは，一度ならず歴史にあった。レーニンはしばしば，小所有者を生みだすおなじ社会的・経済的条件が，『小ブルジョア的偏見のうちでももっとも根深いもの，すなわち，民族的利己的，民族的狭量といった偏見』(全集，第31巻，128ページ，日本語版 142ページ，『民族問題と植民地問題についてのテーゼ原案』）の一つをとくにつよめ，根強いものにすることを指摘した。

諸事実は，民族主義が中国指導部のすべての政策のなかでますます優勢となり，かれらの行為の原動力となりつつあることを語っている。これは，あきらかに『ひと飛び』で全社会主義諸国を追いこし，社会主義世界体制のなかで支配的な地位をしめようとする試みとして考えつかれた『大躍進』の時期にすでにあらわれた。

それ以後このような傾向はますます強化されはじめた。それは，国境問題をめぐって民族主義的情熱を人為的にかきたてたことや，カリブ海危機の時期における中国共産党指導者たちの行動，核問題における中国政府の立場のような，中国政府の行動のなかにあらわれている。

これらの，およびその他の事実は，中国の指導者たちの完全な言行不一致をあばきだしている。『左翼的』言辞と処方箋は，どちらかというと『輸出』用，他国の共産党へのおしつけ用のものであることが，ますます明らかとなっている」。

(3)

スースロフ報告が行われた15日後に，中国共産党中央委員会は，ソ連共産党中央委員会に書簡を出して，前年の11月29日付ソ連共産党中央委員会の書簡に答えている。[5] その内容は，中ソ両国間の紛争に関するもので，次のようにきわめて具体的である。

第一，中ソの国境問題について

歴史的に残されてきた中ソ国境問題は，両国政府の交渉によって解決できるし，解決するまでは国境の現状を維持すべきだと中華人民共和国政府は一貫して考えている。われわれは十数年来ずっとこうやってきた。もしもソ連政府が同様の態度をとるならば，双方は国境で本来なら仲むつまじくつきあい，安寧を保つことができるはずである。

ソ連共産党指導部の中国反対の活動が発展するにつれてこの数年来，ソ連側はたえず国境の現状を破壊し，中国の領土に進出し，占領し，国境事件をひきおこしている。いっそう重大なことは，ソ連側はなにはばかることなく中国の国境地帯で大がかりな転覆活動をすすめ，公然と新聞・雑誌や放送を通じて中国各民族の団結を挑発し，少数民族に祖国から分裂するよう扇動するとともに，数万の中国の公民をだまし脅迫してソ連に逃げこませたことである。これらすべては社会主義国の相互関係の基準を破壊しているだけでなく，一般的な国家関係からいっても絶対に許されないことである。

いま中国の隣国のうち，ソ連共産党指導部とインドの反動的な民族主義者だけが故意に中国との国境紛争を作り出している。中国政府はソ連以外のすべての社会主義の兄弟の隣国とだけでなく，インドを除いた民族主義国家，たとえばビルマ，ネパール，パキスタン，アフガニスタンなどの隣国との間で，歴史的に残されてきた複雑な国境問題をみな円満に解決している。

われわれ両国政府の代表団は，すでに1964年２月25日に北京で国境交渉を始めた。歴史上調印された中国・ロシア国境についての条約が不平等条約であるにもかかわらず，中国政府はやはりこれらの条約を尊重し，これを基礎にして中ソ国境問題を合理的に解決したいと願っている。中国政府は，プロレタリア国際主義と社会主義国の関係の基準に基づき平等な話し合い，相互理解と相互ゆずりあいの精神にのっとって，ソ連政府と友好的に交渉を進めるものである。ソ連側も中国政府と同じような態度をとるならば，中ソ国境問題の解決は当然むずかしいものではなく，中ソの国境は本当に永遠に友好的な国境になりうるものとわれわれは信じている。

第二，援助の問題について

われわれはソ連がスターリンの指導していたときから提供しはじめた友好的な援助についてこれまでずっと適切な評価を与えてきた。われわれは，ソ連人民の友好的な援助が中国の社会主義工業化のため初歩的な土台を築く上に有益な役割りを果したものと一貫して考えている。この点について中国人民はかって数限りなく感謝の意を表明した。

数年来，ソ連共産党指導部は恩人として自らおさまることが当り前になって，「私心のない援助」などということを何度となく吹聴している。最近では今年２月の中ソ友好同盟相互援助条約14周年記念のときに，あなた方の新聞プラウダ，イズベスチヤその他の宣伝機関は，この問題でまたも大いに吹聴した。われわれは現在まで新聞紙上で系統的に，公開的にあなた方に答えてはいない。われわれはソ連の中国に対する援助が一方の側だけのものではなく，まして無償の贈られたものでもなく，おもに貿易という形式を通じて進められたということを指摘しないわけにはいかない。ソ連が中国に提供したすべてのプラント設備と物資は借款の形で提供された。装備や物資とその他の利息をも含めて，われわれはすでに物資，黄金及び国際通貨で返還している。さらにふれておかねばならないことは，われわれがソ連から輸入した品物は国際市場の価格に比べればはるかに高いものだったということである。

たんに中国がソ連側から援助を受けただけではなく，ソ連もまた中国側からそれ相応の援助を受けた。中国のソ連に対する援助がとるに足りないごくわずかなものだとはだれもみることはできない。例を挙げると

1962年の末までに，中国がソ連に供給した食料および油その他の食料品の額は21億新ルーブルに達しており，そのうち重要なものとしては，大豆576万トン，米294万トン，食用植物油109万トン，肉類90万トンである。

同じ時期にわれわれがソ連に供給した鉱産物および金属類の額は14億新ルーブル以上に達しており，そのうち重要なものとしては，リチウム鉱10万トン，ベリリウム鉱３万４千トン，硼砂５万１千トン，タングステン鉱27万トン，圧電石英32.9トン，水銀7730トン，タンタラム・ニオビウム鉱39トン，モリブデン鉱３万７千トン，スズ18万トンなどである。これらの鉱産物のうち多くのものが，先端的な科学の発展とロケットや核兵器の製造に欠くことのできない原料である。

ソ連が中国に与えた借款についていえば，そのうち最も大きな部分はわが国がソ連から軍事物資を購入するのにあてられたことを指摘しなければならない。そしてその大部分は

抗米援朝戦争で使われ，消耗された。抗米戦争のなかで朝鮮人民の負った負担が一番重く，損失は一番大きい。この闘争で中国人民も重大な犠牲を払い，巨額の軍事費を使った。それは中国人民が当然果すべき国際主義の義務であり，なんら自慢にあたいするものではないと中国共産党はずっと考えている。長年のあいだわれわれは毎年，ソ連からのこれらの借款の元金と利息を償還するためにソ連に対する輸出の相当な額をこれにあててきた。それはつまり抗米援朝の戦争のなかで中国に提供した軍事物資ですら無償の援助ではないということなのである。

第三，ソ連の専門家の問題について

中国で援助にあたっていたソ連の専門家は，つねに中国政府と人民から歓迎され，尊重され，信頼されていた。ソ連の専門家の絶対多数が仕事のなかで積極的に努力し，中国の社会主義建設事業の助けとなった。この人たちの勤勉な労働をわれわれはずっと非常に高く評価してきた。われわれはいまでもこの人たちをなつかしく思っている。

ソ連共産党指導部が中国で仕事をしていたソ連の専門家全部を呼びもどすことを一方的にきめたあと，われわれはソ連の専門家にとどまってもらって引き続き中国で仕事をしてほしいこと，ソ連共産党指導部に考え直してその決定を改めてほしいことをはっきりと表明した。あなた方はこのことを覚えているはずだ。

それでもあなた方はわれわれの反対をかえりみず，国際関係の基準にそむいて，一カ月という短期間内に，中国で援助にあたっていた1390人のソ連の専門家を強引に引き揚げ，343件の専門家についての契約および契約の補充文書をほごにし，257件の科学技術協力の項目を破棄した。

あなた方はソ連の専門家が中国の経済，国防，文化教育，科学研究などの部門の250以上の企業および事業部門に配置され，技術設計，装備・設備の取りつけ，製品の試作，科学研究などの面で重要な任務を担っていたということをはっきり知っている。あなた方がむりやりソ連の専門家に自分の仕事を打ち切らせ，ソ連に引き揚げさせたのは，中国の一部の大切な設計の項目と科学研究の項目を中途で停とんすることをよぎなくさせ，ちょうど工事中だった一部の建設工事の打ち切りをよぎなくさせ，ちょうど試験生産の段階にあった一部の工場，鉱山が予定通り生産に入れないようにさせた。あなた方のこうした信義にもとる行為はわが国の国民経済の従来の計画を破壊し，中国の社会主義建設事業に膨大な損失をもたらした。

中国がひどい自然災害にあっていたときに，その機に乗じて，あなた方はこのような重大な段どりをとって共産主義の道徳に完全にそむいた。

あなた方の行為は，あなた方が社会主義国の相互援助の原則を破壊し，専門家の派遣ということを，兄弟国に対して政治的圧力をかけ，内政に干渉し，兄弟国の社会主義建設を抑え破壊する道具にしていることを十分に立証した。

あなた方は，いままた中国への専門家の派遣という問題を出してきた。率直にいって中国人民はあなた方を信ずるわけにはいかない。中国人民はあなた方が専門家を引き揚げたことによってもたらされた傷をいやしたばかりで，それはまだ記憶に新しいところである。ソ連共産党指導部が中国反対の政策をとっている状況のもとで，われわれはその手に

乗りたくない。

われわれは，社会主義陣営各国は本当に平等な，互に内政に干渉しない，相互に援助する国際主義的な原則に基づいて専門家の派遣の問題を処理すべきだと考える。専門家の派遣に関する一切の協定と契約を一方的に廃止したり，破棄したりすることを絶対に許してはならない。もしこれに違反した場合は，国際的な慣例にしたがって相手に損害を賠償すべきである。こうしてこそ中ソ両国の間も，社会主義陣営各国の間も平等互恵に専門家を派遣しあうことができる。

ついでにいうと，われわれは社会主義各国の相互援助という国際主義の原則から出発してソ連の現在の経済状況を大へん気にかけている。もしあなた方がある面で，中国が専門家を派遣してあなた方を助ける必要があると考えるなら，われわれは心よくそうしよう。

第四，中ソ貿易の問題について

この数年来，中国とソ連の貿易額が減っている本当の原因についてはあなた方が一番はっきり知っているはずだ，それはあなた方が思想の食い違いを国の関係の面にまでひろげた結果にほかならない。

あなた方は突然，中国で援助にあたっていたソ連の専門家全部を引き揚げ，わが国の多くの工業・鉱山企業と事業部門の建設の遂行と生産の配分をかき乱し，プラント設備を輸入したいというわが国の需要に直接影響を与えた。お聞きしたいが，こうした状況のもとでむりやりわれわれにこうしたものを買わせておき，展示品として陳列せよとでもいうのだろうか。

そのうえ，あなた方は1960年から中国に対し経済と貿易の面でさらに制限と差別の政策を実行し，両国の経済貿易会談ではわざと難くせをつけ，中国が必要とする重要物資の供給を引き延ばしたり拒絶したりした。あなた方はわれわれが必要としない物資とか，あまり必要としていない物資を大量に押しつけ，われわれが非常に必要な物資は抑えたり，少ししかくれなかった。数年来，あなた方は両国の貿易関係をも中国へ政治的圧力をかける道具として利用した。これでも両国の貿易額の縮少に影響しないということがありうるだろうか。

1959年から1961年までわが国は続いて3年間とくにひどい自然災害にあい，あなた方にこれまでのように大量の農産物やその他の加工品を提供できなくなったが，これは不可抗力の要素によってもたらされたものである。あなたはこうした状況を利用して，攻撃を行ない，貿易額が減った責任を中国に押しつけているが，それはまったく道理に合わないことである。

正直なところ，もし中国側が努力を払わなかったなら，中ソの貿易額はもっと減っていただろう。今年についていえば，すでに中国側はソ連から2億2千万新ルーブルを輸入し，ソ連に4億2千万新ルーブルを輸出する貨物のリストを提出してある。しかしあなた方は道理に合わない引き延ばしの態度をとりつづけ，一方では私たちが必要とする貨物を抑えながら，もう一方では私たちが必要としない品物をむりやり押しつけようと考えている。あなた方は手紙のなかで，「ソ連は今後数年間にあなた方が興味をもつ商品の輸出をふやしてもよい」といっているが，あなた方の言葉と行動は一致しない。

あなた方はよくわれわれのことを「一人仕事をした」と攻撃し，また自分自身が社会主義各国の広範にわたる経済連けいと国際分業を主張しているとホラを吹いている。しかしこの面でのあなた方の実際の行動とはいったいどんなものだろうか。

あなた方は兄弟国の独立と主権を犯し，兄弟国が自分の必要と可能性に基づいて独立自主の基礎の上に自分の経済を発展させることに反対している。

あなた方は経済的に比較的立ち遅れている兄弟国をいじめ，これらの国が工業化を実行することに反対し，なんとかしてこれらの国を永久に農業国の地位に置いておき，あなた方の原料補給地，商品販売市場にしようとしている。

あなた方はまた工業の比較的発達している兄弟国をいじめ，これらの国に伝統的な製品の生産を捨てるよう迫り，あなた方の一部の工業部門に奉仕する付属工場に変えようとしている。

あなた方はまた資本主義世界の弱肉強食の原則を社会主義国の相互関係のなかに持ち込んでいる。あなた方は独占資本グループのやっている共同市場を公然と自分の見ならうべき手本としている。

あなた方のこれらのやり方はすべて間違っている。

われわれは中ソ両国のあいだ，すべての社会主義国のあいだでは，経済，科学技術，文化の面で本当に平等な，お互いに利益のある新しい型の協力関係を実行するよう主張する。

現在の社会主義国経済相互援助委員会はプロレタリア国際主義の原則に基づいて改造を加え，ソ連共産党指導部が一手に牛耳っているこの組織を，社会主義陣営の兄弟国が自分の希望で参加する真に平等互恵の組織に変えるべきだとわれわれは考える。われわれのこの意見が，あなた方のところで積極的な反応をうるよう願っている。

第五，公開論戦をやめる問題について

公開論戦はもともとあなた方が引き起こしたものである。われわれは過去，国際共産主義運動での食い違いを内部の討論で解決することを主張した。しかしあなた方はこれを公然化させた。ソ連共産党第22回大会で，あなた方は1960年の声明で規定されている兄弟党の関係の基礎を破って，公開論戦を国際共産主義運動全般に押しつけ，さらにこれは「レーニン的方式で行なったものだ」といった。あなた方は悪いことをした。あなた方は各国の兄弟党に困難をもたらし，帝国主義と反動派に手助けをした。現在，公開大論戦はすでに全面的にくりひろげられ，真理は論ずれば論ずるほど明らかであり，マルクス＝レーニン主義は論ずれば論ずるほど発展している。悪いことはよいことに変わりはじめている。

この大論戦のなかで全世界の共産主義者，プロレタリアート，勤労人民，革命的なインテリゲンチャ，および，帝国主義や各国反動派に反対することに関心をよせているその他の人々の自覚がますます高まり，見る目がますますはっきりし，彼らの革命的な積極性は大いに高まり，彼ら自身の理論水準は大いに高まっている。公開論戦の結果はあなた方のもともとの願いに反する方向に進み，ますます多くの人が指揮棒の誤った影響から抜けて独立自主で問題を考えるようになっている。こうして公開論戦は必ず国際共産主義運動の歴史上でのいままでの大論戦と同じように新しい革命の高まりの序幕となるであろう。

あなた方は，公開論戦を引き起してマルクス＝レーニン主義の兄弟党に反対するときには，このような公開論戦の立ち場は「唯一の正しい真のマルクス＝レーニン主義の原則的な立ち場」であるとか，『世界の共産主義運動全体にとって有利』であるなどといった。ところが公開論戦のなかで自分の修正主義の本性がますます暴露され，ますます不利な立ち場に立たされると，あなた方は今度は公開論戦は『共産主義運動に重大な損害をもたらした』，公開論戦をやめることは『もっとも賢明』なことであり『世界共産主義運動の団結の利益に合致する』ものであるとかいっている。あなた方はこういっているかと思うとまたああいっているが，あなた方には真理などあるのだろうか，原則性などあるのだろうか，あなた方は一体人にあなた方のどれを信じさせようとしているのだろうか，また一体あなた方のどれに服従させようとするのだろうか。」

中国共産党のソ連共産党批判は，1964年7月に発表された『フルシチョフのにせ共産主義およびその世界歴史における教訓』(6) において，ついにソ連社会そのものの具体的批判となった。「ソ連には敵対階級と階級闘争が存在している」と題する部分を引用すれば次のようである。

「フルシチョフ修正主義集団は，ソ連でプロレタリア独裁を取り消した主な根拠を明らかにしており，彼らの言い分によればそれはつまりソ連ではすでに敵対階級がなくなり，階級闘争がなくなったからだというものである。

ではソ連の実情ははたしてどうだろうか。敵対階級と階級闘争は果たしてないのだろうか。偉大な10月社会主義革命の勝利後，ソ連ではプロレタリア独裁を打ち立て工業の国有化と農業の集団化を経て資本主義私有制を打ちこわし，社会主義の全人民所有制と集団所有制を打ちたてるとともに，数十年にわたる社会主義建設のなかで偉大な成果を収めた。これはソ連共産党とソ連人民がレーニンとスターリンの指導の下に収めたかき消すことのできない重大な歴史的意義をもつ勝利である。

しかしソ連では工業の国有化と農業の集団化を完成したあとも，くつがえされたもののまだ徹底的に消滅されてはいない古いブルジョアジーとその他の搾取階級がいぜんとして存在しており，ブルジョアジーの政治的影響と思想的影響が依然として存在している。都市と農村では資本主義の自然発生的な勢力が依然として存在している。新しいブルジョア分子と富農分子がやはりたえず生まれている。政治，経済と思想の領域では長期にわたってプロレタリアートとブルジョアジーの間の階級闘争が終始つづけられている。

ソ連が最初の，また当時としてはただ一つの社会主義を建設していた国家であり，他のどんな国の経験をも手本にすることができなかったことから，また社会主義社会の階級闘争の法則に対する認識が，マルクス＝レーニン主義の弁証法からかけはなれていたことから，スターリンはソ連がほぼ農業の集団化を完成したあと，早まって，ソ連に『もう敵対しあう階級は存在せず，階級衝突はない』とのべ，社会主義社会内部の一致性を一方的に強調し，その矛盾を見落とし，労働者階級と広範な大衆にたよって資本主義勢力に反対する闘争を進めるのではなしに，資本主義復活の可能性の問題を単に国際帝国主義の武装攻撃と関連ある問題として見ていただけであった。これは当然理論的にも実践的にも正しくない。そうではあるが，スターリンはやはり偉大なマルクス＝レーニン主義者であった。

彼はソ連と党と国家を指導した時期にプロレタリア独裁と社会主義の方向を堅持し，マルクス＝レーニン主義の路線を実行し，ソ連が社会主義の道に沿って勝利のうちに前進するのを保証した。

フルシチョフはソ連の党と国家の指導をにぎってから一連の修正主義の政策を推し進め，資本主義勢力の発展を一層激しく助長し，ソ連でプロレタリアートとブルジョアジーの階級闘争，社会主義と資本主義の二つの道の闘争を再び鋭くさせた。

ここ何年かのソ連の新聞，雑誌の報道をみてみただけでも，ソ連の社会には大勢のふるい搾取階級分子がいるばかりでなく，新しいブルジョア分子がぞくぞく生まれており，階級分化が激しくなっていることを説明する，たくさんの例を人びとは見てとることができる。

ではソ連の全人民所有制の企業の中でのさまざまのブルジョア分子の活動を見てみよう。

一部の工場の指導者と彼らの仲間は，職権を利用して国営工場の設備と資材を流用し，『もぐりの職場』をつくって品物を生産し，これを個人で売ったりあるいは山分けにして大もうけをしている。

たとえばレニングラードのある軍需品工場の指導者は，自分の手下を工場の『すべての重要なポストにつけ』，『国営企業を個人経営の企業に変えてしまった』。かれらは勝手に軍需品でない品物をつくり，3年間に万年筆を売りさばいただけでも古いルーブルで120万ルーブルを着服した。これらの人たちの中にはまた『一生せつ盗を続けてきた』『1920年代』の『投機商人』がいる。

ウズベクのある絹織物工場の工場長は，技師長，会計課長，販売係長，職場主任などとグルになって『新しい企業家』になった。かれらはいろいろな関係を通じて十何トンもの人造絹糸の絹糸の原料を買い入れ，『帳簿に記入しない品物を生産した』。かれらは自分たちが勝手に労働者を募集し，12時間労働制を実行した。

ハリコフのある家具工場の工場長は，工場の中に『もぐりのメリヤス職場』を設け，投機的な生産を行なった。この工場長は『何人もの妻をもち，何台もの乗用車をもち，何坪もの家をもち，またネクタイ176本，ワイシャツ100着近く，セビロ数十着をもっていたし』，すっかり競馬のかけにとりつかれていた。

これらの人びとの活動は決して孤立したものではない。かれらはきまって国家の物資供給部門の要員とグルになっていたが，警察と司法機関の中にもかれらの保護者や代理人がおり，はなはだしいのは国家機関の高級幹部の支持と保護をうけている。

たとえばモスクワ精神病予防治療所のある付属工場の工場長とその仲間は『もぐりの企業』をつくり，わいろを使って「メリヤス機械58台」と大量の原料を手に入れ，また「52の工場，手工業生産協同組合およびコルホーズ」とわたりをつけて数年の間に300万ルーブルをかせいだ。かれらは社会保安機関の要員，監視員，検査員，巡察員などを買収していた。

ロシア連邦のある機械工場の工場長は，もう一つの機械工場の副工場長やその他の係りとぐるになって，43人で900台余りの紡織機械をぬすみ，中央アジア，カザクスタン，カ

フカズなどの工場に売り渡し，これらの工場の指導者はこれを使ってもぐりの生産をやった。

キルギスの4，50人からなる横領せつ盗グループは，かれらが握っている2つの工場でヤミの品物を生産し，国家の財産3千万ルーブル以上をぬすんだ。このグループには共和国計画委員会の議長，商業省の次官や共和国閣僚会議，国民経済委員会，国家監督委員会などの局長と所長7人が含まれていたほか，『流刑先から逃げてきた大富農』も含まれていた。

これらの例からも，これら堕落・変質した分子がにぎっている工場は，名義の上では社会主義企業がになっているものの，実際にはかれらが金もうけをするための資本主義企業に変ってしまっていることがわかる。かれらと労働者との関係は搾取と被搾取，抑圧と被抑圧の関係に変ってしまっている。一部の生産手段を自分のものにし，これを支配し，他人の労働を搾取する——このような堕落・変質した分子は正真正銘のブルジョア分子でなくてなんだろうか，かれらと気脈を通じ自分の利益をむさぼってやみ取り引きをし，わいろを受け取り，すわっていて分け前にあずかり，さまざまの搾取活動に加わっている国家機関の職についているかれらの仲間は，正真正銘のブルジョア分子でなくてなんだろうか。

はっきりと見てとれるように，これらの人びとはみなプロレタリアートに敵対する階級に属し，ブルジョアジーに属する。かれらの社会主義反対の活動こそプロレタリアートを攻撃するブルジョアジーの階級闘争である。

では次にコルホーズの中でのさまざまな富農分子の活動を見てみよう。

一部のコルホーズの指導者とその仲間たちは，ほしいままに横領，せつ盗をはたらき，投機とヤミ取り引きを行ない，思うままに金を使い，コルホーズ員を搾取している。

たとえばウズベクのあるコルホーズの議長は『村全体を恐怖に陥れている』。コルホーズの重要なポストは『みなかれの姉婿，妹婿や妻の弟，妻の父とその他の親友大勢によって全部占められている』。かれは『コルホーズの金13万2千ルーブルを意のままに使って自分の需要を満している』。かれは乗用車1台，オートバイ2台と3人の妻をもち，『彼女たちにそれぞれ一軒の家をもたせている』。

クールスク州のあるコルホーズの議長は，コルホーズを自分の『領地』と見なしている。彼は会計係，出納係，倉庫主任，農業技師，商店の主任などと結託してお互いにかばいあい『コルホーズ員を搾取し』，数年間に十数万ルーブルを横領した。

ウクライナのあるコルホーズの議長は，会計係とグルになって書類や帳簿をごまかし，コルホーズから5万ルーブル余りを盗んだ。この会計係はまた『模範的な会計係』と宣伝されて，モスクワでの国民経済の成果を示す展覧会にかれの業績が展示された。

アルマアタ州のあるコルホーズの議長は，投機売買に専念した。彼は『ウクライナやウズベクから醸造用のくだもののジュースを買い入れ，ジャンブルから砂糖とアルコールを買い入れて』加工した上，これを高い値段で売りさばいていた。このコルホーズは年産100万リットルの醸造工場をもち，カザフ共和国のすみずみに投機売買の網を張りめぐらし，投機売買がこのコルホーズの収入の主な源の一つになっていた。

白ロシアのあるコルホーズ議長は，『領土を与えられた小貴族然として』『何でも意のままにふるまっていた』。彼はコルホーズには全然住まず，都会か自分の『豪華な別荘』に住み，いつも『いろいろな商売の経営にいそがしく』，『投機活動を行なっていた』。彼はよそから家畜を買ってきて自分のコルホーズで生まれたものといっては売り，うそっぱちの生産成績を報告していたが，それなのに『いつでもほめたたえられている模範的な指導者』になった。

これらの例からもわかるように，これらのコルホーズの指導者が押えていたコルホーズは実際には彼らの個人財産にかわっていた。彼らは社会主義の集団経済を新しい富農経済に変えてしまった。時には彼らは上級の指導機関に自分の保護者をもっていた。

彼らとコルホーズ員との関係もやはり抑圧と被抑圧，搾取と被搾取の関係に変わってしまっていた。このような農民の上にあぐらをかいた新しい搾取者は正真正銘の新しい富農分子ではなくて何だろうか。

はっきりとみてとれるように，これらの人びとはみなプロレタリアートや勤労農民と敵対する階級に属し，富農階級つまり農村ブルジョアジーに属している。彼らの社会主義反対の活動こそはプロレタリアートと勤労農民を攻撃するブルジョアジーの階級闘争である。

国営企業とコルホーズ以外に，ソ連の都市と農村にはまだ大ぜいのブルジョア分子がいる。

彼らのあるものは個人企業をもうけて自分で生産し自分で売り，あるものは個人の工事請け負い組を組織して国営あるいは生産協同組合の建築工事を公然と請け負い，またあるものは個人で旅館を経営している。レニングラードのある『ソ連の婦人資本家』は労働者をやとってナイロンの婦人用ブラウスをつくり，これを売りさばいて，『一日に700新ルーブルかせいでいた』。クールスク州のある工場主は防寒用のフェルトの靴をつくって高い値段で売りさばいていた。この工場主はフェルトの靴540足，金貨8キロ，衣料3000メートル，じゆうたん20枚，羊毛1200キロなど大量の物資を持っていた。

ゴメール州のある個人企業主は『労働者と職人をやとい入れて』2年間に12の工場の建設工事あるいは大がかりな修理工事を高い値段で請け負った。オレンブル州には『100を越える個人経営の旅館や倉庫がある』が『コルホーズと国家のかねが旅館経営者の財布にぞくぞくと流れこんでいる』。

彼らのあるものは投機売買を行ない，やすい値段で品物を買って，これを高い値段で売り，買った品物を遠くに持って行って売って暴利をむさぼっている。モスクワには農産物の投機商人が大ぜいいる。かれらは『何トンというみかんやりんご，それにいろいろな野菜をモスクワに運んで，やみ値で売りさばいている』。『一部の人はこうした利益をむさぼる連中のためにあらゆる便宜をはかり，市場の宿泊所や保管室をはじめその他の設備をかれらに使わせている』。クラスノダル地方のある投機商人は『営利会社』を自分でつくり，『販売人12人と運搬係2人をやとい』，『1千頭の豚や数百ピクルの食料，数百トンの果物』を農村からドンバスに運び，また『盗んできた大量のれんがと貨車にいっぱいのガラス』やその他の建築用資材を都市から農村にもっていって売りさばき，大もうけした。

彼らのあるものは専門に仲買人やブローカーをしており，その交際範囲は広く，彼らにわいろさえ使えば何でも手に入れることができる。レニングラードにこうした仲買人がおり，『貿易大臣でもないのにすべての品物をその手ににぎり，鉄道係官でもないのに車輌を押えている』。彼は『厳格な調達のルートを経なければならない品物を調達のルート以外の経路で手に入れることができる』。『レニングラードの倉庫という倉庫はみな彼のために奉仕している』。彼は自分の手を通った商品から膨大な『報酬』を得，1960年だけでも林業会社から70万ルーブルを受け取った。レニングラードにはこうした仲買人が『大ぜい』いる。

これらの個人企業主と投機分子がやっていることは明からさまな資本主義搾取の行為である。彼らはプロレタリアートと敵対するブルジョアジーに属しており，これは非常に明らかなことでなくて何であろうか。

実際にはソ連の新聞雑誌自身も前に述べたような人びとを『ソ連の資本家』だとか『新しい企業家』『個人経営の企業主』『新しい企業』『投機商人』『搾取者』などと呼んでいるのである。フルシチョフ修正主義集団はソ連に敵対階級が存在しないといいはっているが，これは自分で自分のほほを打つことになるのではないだろうか。

私たちが前に引用した資料はソ連の新聞雑誌がみずからもらした一部の例にしかすぎない。これらの事実からだけでもすでにおどろくべきものだが，ソ連の新聞雑誌がもらしていない上に，おおいかくし，かばっている，もっと大きな，もっと重大な事実がまだまだたくさんあるのである。私たちがこれらの資料を引用したのは，ソ連に果たして敵対的な階級と階級闘争があるかないかという，こうした問題に答えるためである。これらの資料は多くの人がたやすく見ることができるものであり，フルシチョフ修正主義集団自身も否定しようのないものである。

これらの資料だけをもってきても，ソ連では都市から農村に至るまで，工業から農業に至るまで，生産の領域から流通の領域に至るまで，経済部門から党と国家機構に至るまで，末端組織から高級指導機関に至るまで，すべてプロレタリアートに対する敵対的なブルジョアジーの狂気じみた活動が山のように現われているということを説明するのに充分である。これらの社会主義反対の活動は，ほかでもなくブルジョアジーがプロレタリアートに対して進めている鋭い階級闘争であって，そのほかの何ものでもない。

社会主義国家で社会主義に対する新旧ブルジョア分子の攻撃が現われるのはもともとふしぎなことではない。ただ党と国家の指導がマルクス＝レーニン主義的なものであれば，それはおそれるにたらない。しかし今日のソ連で問題が重大であるのはフルシチョフ修正主義集団がソ連の党と国家の指導を奪い，ソ連の社会に一つのブルジョアジー特権階級が現われているということにあるのである。」

註 (1) イズヴェスチヤ 1963年7月5日
(2) プラウダ 1963年7月14日
(3) 人民日報 1963年9月6日
(4) ソ連共産党中央委員会1964年2月総会におけるスースロフ報告
(5) 中国共産党中央委員会からソ連共産党中央委員会にあてた書簡 1964年2月20日
(6) 人民日報 1964年7月14日